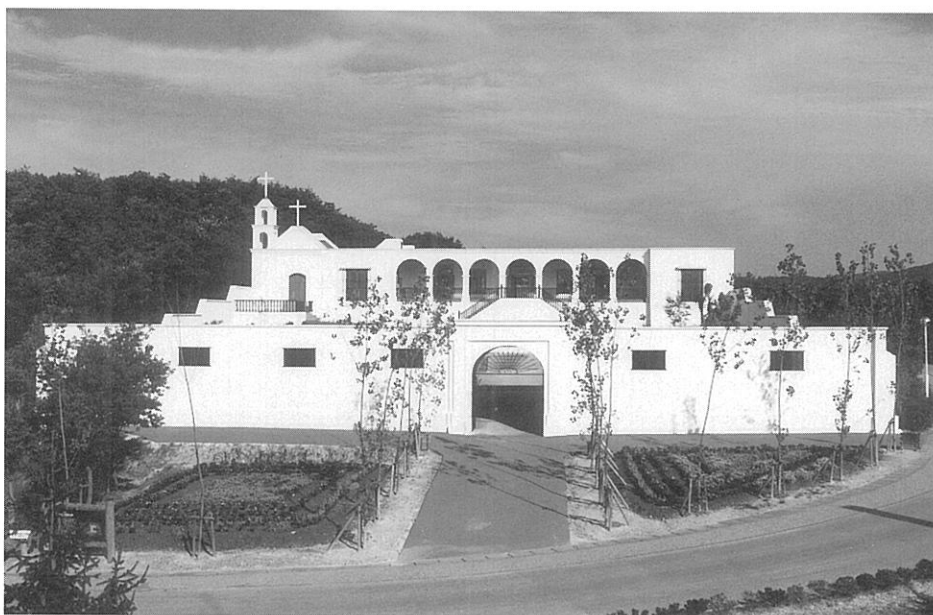




ペルー・アシェンダ領主の家（野外民族博物館 リトルワールド）

中南米の旧スペイン領において16世紀末ごろから発達したアシェンダ（大農場）領主の邸宅で、ペルー海岸地方のものです。丘の上に中庭を囲んで母屋が建ち、その左端にカトリック教会が付属しています。前庭の手前には農場経営のための事務室と倉庫があります。教会の壁には「キリストの誕生」「最後の晩餐」などの宗教画が、倉庫の壁には「インカ帝国の没落」「アシェンダの風景」の絵があり、植民地経営華やかかなりしころのアシェンダの様子をものがたっています。

アシェンダでは、スペイン系の領主がインディオ（先住民）や黒人の小作人を使って綿などを栽培し、ばくだいな収益をあげていましたが、ペルーでは1969年の農地改革によって解体し、共同農場となりました。

（野外民族博物館 リトルワールド 高橋 貴）

目 次

●平成3年度愛知県博物館等職員研修会報告	2
●第16回東海三県博物館協会交流研修会報告	3
●平成3年度自然科学部門研修会報告	5
●平成3年度美術部門研修会報告	6
●新規加盟館紹介	7

平成3年度

愛知県博物館等職員研修会報告

平成3年度愛知県博物館等職員研修会が、平成3年9月5日(木)～6日(金)にかけて岡崎勤労福祉会館において開催されましたので、その概要を報告いたします。

日程 第1日目(会場・岡崎勤労福祉会館)

13:00～13:40 受付・あいさつ

愛知県教育委員会文化財課主幹 水谷良夫氏

愛知県博物館協会会長 亀井誠治氏

岡崎市教育委員会社会教育課長 板倉幸治氏

13:40～17:00 研究協議(参加者53名)

テーマ 「外から見た博物館」

上記議題により、武豊町歴史民俗資料館友の会副会長 田島 明氏、岡崎市教育委員会社会教育課社会係長 太田昭夫氏、名古屋商科大学付属高校教諭長畑 実氏、愛知県埋蔵文化センター課長補佐森 勇一氏の4名による事例発表があり、その後参加者による活発な討論が行われた。

研究協議後の懇親会では、自由な雰囲気の中、情報交換や議論が交わされ、館相互の親睦を深めることができた。

日程 第2日目(見学会)

9:00 出発

9:20～10:30 安城市歴史博物館見学

11:00～12:00 おかざき世界子ども美術博物館見学

12:30～13:30 昼食(岡崎公園内)自由解散

2日目の見学会は、安城市歴史博物館とおかざき世界子ども美術博物館を見学した。安城市歴史博物館では、館の紹介ビデオを見せて頂いたあと、常設展と企画展「三河と足利氏」を自由見学した。おかざき世界子ども美術博物館では、副館長の足立誠氏から館の概要説明を頂いたあと、学芸員荒井信貴氏の案内をうけた。岡崎公園で自由解散後は、希望者のみ岡崎城と三河武士のやかた家康館を見学してもらった。

いずれもスケジュールの都合上、見学に十分な時間をとることができなくて残念であったが、幸い晴天にも恵まれ、2日間にわたる研修会は、無事終了した。

◎テーマ設定について

今回の研修会のテーマ設定にあたっては、知立市・岡崎市の博物館関係者に集まってもらい、数回にわたって討議を重ねた。

県内研修会も今回で10回目を迎え、テーマとすべきことはある程度出尽くしたように思われる。従来は、収集・展示・普及といった博物館活動の具体的な実践例を取り上げるという博物館職員による博物館職員の

ための研修会であったが、今回はこれまでとは基本的に視点を改めてみようということになった。そこで、利用者側から見た博物館について考える場を設定してみても、ということになり、「外から見た博物館」というテーマで事例発表者には博物館職員以外の人を迎え、博物館への要望、批判など意見を聞いてみることにした。



◎研究協議の概要 テーマ「外から見た博物館」

○武豊町歴史民俗資料館友の会副会長 田島 明氏
「原点に戻る」(一般利用者として)

博物館とは何か、資料館とは何か、という問い直しに始まり、入場料の問題、展示の問題など、日頃博物館を利用する際に感じる疑問を率直に述べて頂いた。

博物館には、どこか冷たく重苦しいイメージがある。たとえ館側がさまざまな努力をしたとしても、見学に来る人は専門知識に乏しい人がほとんどなので、館の善し悪しの判断はその場の雰囲気であってしまふ。見る側に立った展示、すなわち見やすく分かりやすい展示であることが大切である。専門性を重視するだけでなく、博物館本来の役割を考え直してほしい。

見る側と見せる側の価値観の違いについて考えさせられる発表であった。

○岡崎市教育委員会社会教育課社会係長 太田昭夫氏
「生涯学習時代の博物館」(社会教育関係者として)

今、世の中の急激な変化にともない、人々の関心は文化や趣味に向き始めている。つまり、「文化」がお金になる時代が日本にも到来したということである。そのような社会状況を反映して、生涯学習振興法が平成2年に成立した。この法は文部省始まって以来の民活導入法案であり、これによって各省さまざまな生涯学習に関する事業が進められていくことになる。

博物館もそうした時代の波を受けながら大きく変わる時期に来ている。「元気がない博物館」、すなわち、つまらない、わからない、親しみにくい、疲れる博物館は今後廃館に追い込まれるであろう。具体的には、展示が貧弱、固定的、解説がレベルに合わない、主要なコレクションが常時見られない、触れることができないなどといった要素があげられる。一方、「元気の出る博物館」とは、ボランティアを積極的に導入し、そ

の意見を反映するような人間中心の博物館である。

リアルタイムな話題を豊富に引きながら、社会教育の現場から21世紀を展望した博物館について論じて頂いた。

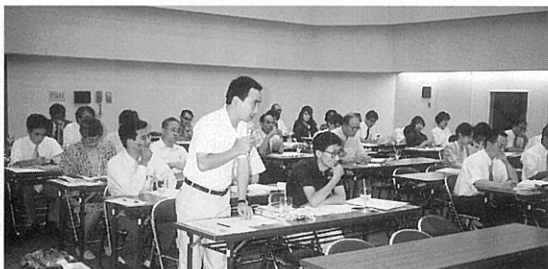
○名古屋商科大学附属高校教諭 長畑 実氏

「学校教育と博物館」(学校教育関係者として)

博物館の教育的な利用を自らの研究テーマとし、学校教育の現場で積極的な活動が続ける氏のこれまでの取り組みを紹介して頂き、そのなかで今、博物館に希望することを論じて頂いた。

豪・米での優れた博物館教育プログラムの実践例を参考として、自作のワーク・シートを使って、子どもたちに「モノの見かた」を身につけることを博物館体験のなかから学びとってもらおうとしている。

博物館が所蔵する歴史的、文化的な資料を通して国民の歴史的、文化的な価値観を育むことが、博物館の重要な使命であるがゆえ、その展示は教育的なものではないといけない。そして今後、博物館が専門的教育担当者をおく部局を設け、学校への教育プログラムや展示についての資料の提供、教員のための研修会の計画など、学校教育との結び付きを深めていくようなシステムづくりを進めることを望みたい。



○愛知県埋蔵文化センター課長補佐 森 勇一氏

「外からみた博物館」(地域文化活動推進者として)

かって地域研究を続けるなかで、もし、研究や発表の拠点となるような博物館があれば、さらに幅広い活動ができていただろう。そこで、地域の特色を生かし、地域に根ざした「地域のシンボルとしての博物館」をのぞまれる博物館のスタイルとして提唱する。そしてその展示は、その地域に終始するのではなく、地域を通して、日本の歴史、自然史へと視野を広げられるようなものでありたい。博物館が「知的レジャーの場所」になる時代、見学者の眼は確実に肥えてきている。そういう市民を味方に組織された友の会活動を展開することも重要である。

最後に、愛知県に自然史・歴史・産業の3点セットの県立総合博物館を速やかに建設しなければ手遅れになりますよ、と警鐘を鳴らして頂いた。

(文責 実行委員 岡崎市郷土館 鈴木智子)

第16回

東海三県博物館協会交流研修会報告

平成3年10月17日(木)・18日(金)の2日間にわたり、第16回東海三県博物館協会交流研修会が岐阜県恵那市のグリーンピア恵那及び恵那市周辺で開催されました。当日は生憎の雨降りでしたが翌日はうって変わって快晴に恵まれ、54館78名の参加者によって盛会のうちに終了しました。以下その概要を報告します。

第16回 東海三県博物館協会交流研修会



日程 第1日目

- 13:30~14:00 受付
- 14:00~14:10 挨拶
- 14:15~15:30 記念講演「博石館の経営について」博石館館長岩本哲臣氏
- 15:40~17:00 研究協議
テーマ「生涯学習と博物館」

日程 第2日目(見学会)

- 9:00 宿舎出発
- 9:40~10:40 博石館(恵那郡蛭川村)
- 11:20~12:25 青邨記念館(中津川市)、苗木遠山史料館(同)、昼食後中津川駅で解散。

記念講演は、岐阜県恵那郡蛭川村で石材業を営む株式会社岩本のオーナー岩本哲臣氏が石の博物館「博石館」を設立するに至った経緯とその経営についての内容であった。ほとんど手作りで開館にこぎつけ、開館後3年目から黒字に転化したこと、エジプトの1/10大のピラミッド造りに当っては、マスコミを利用して大いに宣伝効果があったこと、或いは職員の中に「よるこびづくりに熱くなれ委員会」を設け、客を大切にするサービス心を失わないため自己啓発に努力していることなど、その経営理念を熱っぽく語られた。蛭川村は全国にその名を知られた御影石のほかには水晶・トパーズなど87種類の鉱石を産出する全国三大産地の一つに数えられており、現在42社の石材業者がある。博石館の設立意図は、石を通して歴史を学び、石材工業



を研究するということであり、そういった村の歴史そのものを扱っているわけではないが、現在の蛭川村の特徴を示す観光施設的な性格を持つものであろう。

研究協議では、「生涯学習と博物館」のテーマに基づき各県1名づつ次の3氏の事例発表が行われた。

愛知県 尾西市歴史民俗資料館 小林 弘昌氏
三重県 県立斎宮歴史博物館 榎村 寛之氏
岐阜県 岐阜県陶磁資料館 加藤よね子氏

愛知県の小林氏は、尾西市歴史民俗資料館が昭和61年4月の開館以来毎年行っている市民向けの講座について発表された。当初は何か生涯学習に係わる事業を行ないたいとして、とりあえず講座・教室をはじめたということであるが、初年度にまず古文書入門・茶道・百人一首入門・拓本入門を行ない、翌年度には華道・染色・親子土鈴づくりなどを加え、一方で、館の特色を活かした街道(美濃路)にちなむ講座も設けられた。年々内容も多岐にわたり増加をみてきたが、カルチュアセンター化への危惧もあり、徐々に地元の歴史関係に視点を向け、6年目に至ってようやく館独自の基本方針のようなものが定まりつつあるという。講座も回を重ねるごとに受講者の固定化がみられ、今後は受講者の人達の主体性を重んじるとともに内容の吟味も必要となってくるであろうとのことであった。尾西市の場合は、市民の要求に対応しつつも歴史資料館としての方向付けを明確にするという点で、地域に密着した館としてのあり方の一つの例を示すものであろう。

三重県の榎村氏の発表は、斎宮歴史博物館の特殊な性格のもとでの生涯学習の課題と展望について言及された。この館は、一般には馴染みの薄い「斎宮跡」を知ってもらうためのものという性格が強いため、その普及啓発事業の充実が大きな課題となっており、しかも人事異動が頻繁なため職員の啓発・研修が大きな比重を占めるという問題も抱えているという。しかし展覧会の他に博物館講座・日曜映画会や十二単試着会・オペラ斎王・ウォークラリーなどの各種イベントも数多く開催され、また、県の埋蔵文化財センターが併設されているため、発掘調査現地説明会の他に体験発掘

というユニークなものも行なわれている。今後の方針としては、教育現場との交流、地域社会あるいは民間との連携を深めながら生涯学習の機会を設け、それも知識の押し付け的な窮屈なものでなく、むしろストレスをなごませる場として機能するのが望ましいとのことであった。

昨年6月、文部省で「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」が制定され、各県の教育委員会に生涯学習を推進すべき体制づくりが要請されているという背景があり、三重県教育委員会でも昭和63年からその検討委員会が設置され、今年の3月に『三重県の生涯学習の在り方について』という報告によって文化活動へ提言がなされたという。



県レベルでは、特に行政面での先導的役割を負っているともいえる県立博物館に対して具体的な基盤整備が求められているのであるが、県立施設の場合、市町村の地域密着型博物館に比べて住民との距離は遠いといわざるを得ず、ともすれば理念が先にありそこから具体化の方向へという図式が生まれ、尾西市の場合とは対象的な性格を示しているともいえる。

生涯学習と博物館の問題は、昨年の日本博物館協会大会などでも取り上げられたが、博物館の現場にとっては漠然としたイメージが拭えないようにも思われる。今回の研修会について言えば、記念講演も含めた全体の研究テーマとして設定して頂きたかったし、実際にどんな問題点があるのか、各館の実状から具体的な意見交換がもたれば、もう少し焦点が明確になったかもしれないという印象を抱いた。博物館も昨今、入館者数を気にするあまり、展覧会ばかりに比重を置きがちであるが、将来的にみて生涯学習とのからみは大きな課題となることが予想されるだけに、時間の制約もあってあまり踏み込んだ話し合いがもたれなかったことが惜まれる。

以上、主催県の方々のご苦勞・ご配慮にはたいへん感謝いたしますが、報告かたがたあえてそんな感想を述べさせて頂きました。

(文責 実行委員 一宮市博物館 毛受英彦)

平成3年度

自然科学部門研修会報告

と き：平成4年2月14日(金) 10:30~16:30

ところ：名古屋科学館

内 容：午前＝「科学系博物館におけるコンピュータ利用について」

講師 水嶋英治氏(科学技術館学芸員)

午後＝実習(パソコンによるデモンストレーション)

講師 田代英俊氏(科学技術館副主任)

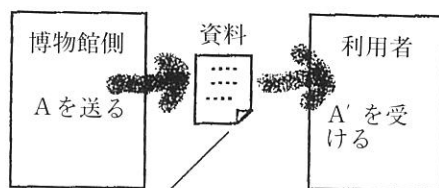


この研修会は、愛知県博物館協会と全日本博物館学会との共催で行われました。参加者34名のうち愛博協関係者が約6割で、博物館学会関係者は東京をはじめ広く県外各地から参加頂きました。午前の部の講師、水嶋氏は科学技術館の展示企画をしていましたが、数年前より全国各地から科学館の企画・展示協力の要請が多くなり、それに対応する部署が新設され、現在はそこに所属されているとのこと。今回は「博物館メディアの統合化とデータベース」について、次の2つの項目でお話を伺うことができました。

1. 博物館におけるメディアの系向
2. データの標準化の世界的動向

以下、話のポイントと思われる内容を列記します。

- メディアとして一方通行型だけであったものが、双方向型も利用されるようになってきた。
- 博物館情報の形態には、もの系、人系、情報系、環境系があるが、情報系についていえば、次のような分類の仕方がある。
 - ・一般利用者に提示すべき情報、提示しない情報
 - ・ストック型の情報、フロー型の情報(いつどこで何をやっているかなど)
- ストック型だけでなくフロー型情報も重要となる。
- 博物館の情報提供方法が拡大してきており、資料の内容を博物館側の視点でどのような切り口でみせるかが重要である。



博物館側の編集技術が問われる

- 現在、テキスト(文字情報)・音・映像はバラバラの情報としてではなく、ハード(コンピュータ)でまとめて共有することができるようになってきており、コストパフォーマンスもよい。
- 博物館では、図書館ほどリファレンスサービス機能が充実していないが、必要性は高まってきている。
- 科学系博物館10数館がパソコン通信を利用した「ミューズネット」を組織し、一般へ情報提供をしたことがある。いろいろな事情で今は活動していないがまた復活したい。
- アンケートなどを行う場合、パソコン通信を利用すれば、他館の意見を聞きながら調査項目を修正し、実情にあったものができた。
- パソコン通信の個人利用としては、新聞社のデータベースにキーワード(たとえば「博物館」「美術館」等)を登録しておき、全国の地方版も含めて、そのことばの関連記事を送ってもらい、夕刊を読むようにコンピュータを読むことができる。
- ヨーロッパの博物館は、現在10%程度がコンピュータ化しており、今後10年間ですべてコンピュータ化するだろうという予測もある。
- 図書館では目録規則が世界レベルで調整されている。今、博物館もデータの標準化の動きが激しくなってきた。イギリスの「標準データ」フランスの「目録規則」スイスの「国定文化財データベース入力情報基準」などである。
- 日本はデータの標準化の点で立ち後れているが、いずれ必ずやらなければならないことなので、それを意識したデータベースを築いておく必要がある。

午後の実習は、5種5台のマッキントッシュを使って、博物館職員が楽しく資料のプレゼンテーション、データベースができるハイパーカードというコンピュータソフトの実例や所沢航空記念館のデータベース様式、動画を自由に制御するソフトやCD-ROMソフトなどを紹介頂いた。

(文責 実行委員 豊橋市自然史博物館 家田健吾)

平成3年度

美術部門研修会報告

平成4年2月28日(金)、昭和美術館を会場に美術部門の研修会が開催され、3名の講師よりそれぞれ専門分野の有意義な講義を受け、参加者は貴重な体験を得ることができました。以下、その内容を報告します。

A.『彫塑作品について』

講師 早川 収氏(元二科会会友・日美連会員)

(1)彫刻(彫塑)作品の魅力

○普段我々は物を「量のアウトライン」としか見ていない。

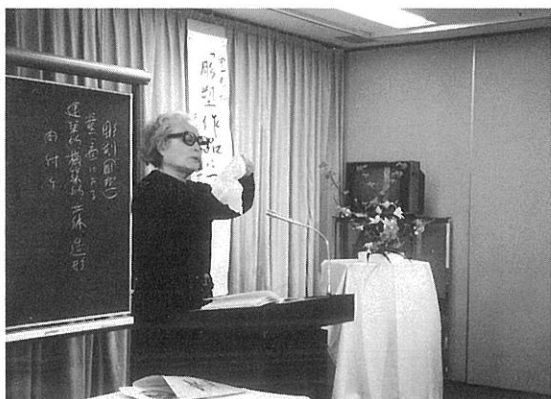
↓

○優れた彫塑作品＝量と面による建築的・構造的・立体的な造形。

○量感(量の美＝生命力)が人の心を打つ。

○量感の表現＝量と面による肉付。

量感をリズムカルに表現する＝非常に難しい過程。



(2)近代彫刻の登場

○日本における西洋「彫塑」の初紹介。

それ以前のは工芸的要素が強かった。

例①西郷隆盛像＝日本初の彫塑作品

②萩原守衛

③ロダンの量感表現の変遷

(3)科学と彫刻

○科学＝過去からの積み重ねをもとに発展。

彫刻＝いつも最初から出発。過去からの積み重ねから発展するものではない。

例 ギリシア時代の彫刻やミケランジェロの作品を越えるものはまだ現われていない。

○生活の中から生まれてこない作品は、生命力がない(芸術とはいえない)。

(4)作製の体験談

○作製の日程や、技法への知識、彫刻家の体験談は、鑑賞者の作品への理解を深める。

例 ブロンズ像の作製について

(5)陳列の方法

○作品を効果的に、個々、ひきたつように陳列するには工夫が必要である。

↓

展示室内で、立体的に、リズムカルに配置すると効果的。



B.『博物館・美術館の空気質の評価と汚染物質の除去』

講師 鈴木良延氏(清水建設株式会社 技術研究所環境研究部部長)

(1)ビル内空気質の汚染の原因

○外気からの汚染質

○室内で発生する汚染質

↓

○対策—博物館・美術館に関しては、東京文化財研究所と連絡をとり研究。

医療施設、人の居室の空気質改善。電気・コンピューター・半導体の保護も必要。

(2)ビル内空気浄化システム

○外気からの汚染質(酸化物)

例・火山、土壌、海岸が原因のもの、花粉など——自然が原因。

・産業排気、自動車排気ガスなど——人為的な原因。

○ゴミ、ホコリ——フィルターで除去。

○酸性ガス——活性炭を改良した吸着材で除去。

○装置2種

①外気浄化方式

②外気循環空気一括浄化方式

各々の状況により、選択して使用。従来は①のみ。最近では②を必要とする環境が増えている。

(3)空気質の評価

○金属片暴露による実験

空気質を改善前と改善後に評価し、効果を確認する。

○銀(Ag)・銅(Cu)・アルミ(Al)の3種類の金

属片を使用。30mm×45mm×0.3mm、純度99.9%。
アクリル板に取り付け、評価したい空气中に暴露する。

↓

- 腐食の状況を調査し、原因を分析する。
 - ・全体観察 ・重量増加 ・光沢度 ・X線マイクロアナライザー
 - 改善前(又は、清浄装置入口)では亜硫酸ガス・硫化水素・一酸化窒素・二酸化窒素が多く検出される。また、これらの混合物は腐食を促進させる。改善後(又は、清浄装置出口)では著しい効果が得られた。
 - 改善前の空気質を評価し、汚染の原因を知ることにより、経済的に清浄装置を利用することができる。
 - また、照明による温度上昇の利用などエネルギー効率よく、目的を果たす工夫も必要である。
- 例 明治神宮宝物殿の御馬車保存ケース

(4)内部発生汚染質

- モルタルから発生するガスを捕集し、同定を行う。
アルカリ物質—主成分アンモニア
セメント製造段階に添加する助剤、砂・砂利の成分の影響で+αの成分が入る。
コンクリート硬化の際、排出される水分と一緒にアンモニアが発生する。

↓

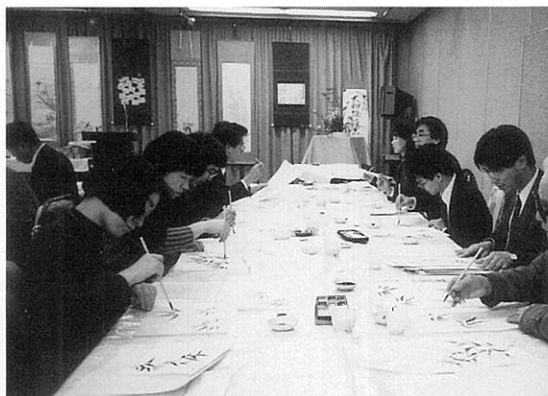
- 対策として
硬化を早める(温度を上げる)。
60℃、70時間で反応はほとんど終了。
- 博物館・美術館の空気質
 - ・文化財を保存する容器として適当かを評価してから使用する。
 - ・“枯らし”の期間
 - ・一夏、又は一年間置く。→かなり安定する。

○今後の課題

- ・低スランプ(水分の少い)コンクリートの開発。
- ・乾燥期間の確保(建設段階において)。
- ・換気をよくする。
- ・発泡ウレタンによる壁面の断熱(内壁をコーティングしてしまう)。
- ・清浄装置による汚染物質発生期間の短縮化。
 - *外気・循環空気一括方式=従来の方法。
 - *壁周りに余裕をつくり、清浄装置を取りつけ除去する。=まだ実現していない。

C.『大和絵の構成、技法、画法について』

講師 堀江勤之助氏(中部伝統染織工芸会代表幹事・堀江染色研究所所長)



(1)大和絵の初歩的な技法・画法を用いて

- 絵ハガキなどの作製。
- 博物館・美術館の見学者のサービスなどに活用する。

(2)堀江氏の作品を例に解説

- 染色・織の技術
文化財の復元も。
組織を分解し、材質から染料まで正確に再現。
古い衣服、絵画などの修復、復元。有職故実に基づいた作品。

(3)大和絵の技法・画法の実習

- 教材(笹の絵、葦絵など)を用いて運筆の練習。
- 墨流し技法の実習。

以上

(文責 実行委員 昭和美術館 服部昭義)

新規加盟館紹介

平成3年度に当協会へ加盟されました館の概要を、ここに紹介します。

豊田市民芸館・陶芸資料館

所在地 〒470-03 豊田市平戸橋町波岩86番地100

電話 (0565) 45-4039

交通 名鉄三河線平戸橋駅から徒歩15分
猿投グリーンロード枝下インターで降り右折5分

沿革 豊田市の北にそびえる猿投山の西南麓には、平安時代を中心とした数多くの古窯が存在しています。それらは猿投窯と呼ばれ、我が国の古代の窯業の中心地でありました。

豊田市陶芸資料館は、この猿投窯の出土資料の展示館として、古陶磁研究家本多静雄氏

の協力を得て、昭和55年4月に開館しました。また、昭和56年東京駒場の日本民芸館が改築されるのに伴い、大広間と、民芸運動の創始者、柳宗悦氏の書斎が壊されることとなったため、これを譲りうけて豊田市民芸館として開館いたしました。

その後、第二民芸館、茶室、土蔵、西洋館、第三民芸館などを増築、開館しました。

施設 敷地 12,310㎡

建物面積	陶芸資料館	590㎡
	第一民芸館	210㎡
	第二民芸館	180㎡
	茶室勘桜亭	48㎡
	土蔵	73㎡
	西洋館	46㎡
	第三民芸館	512㎡



第3民芸館（左）と土蔵

開館 AM9時～PM5時

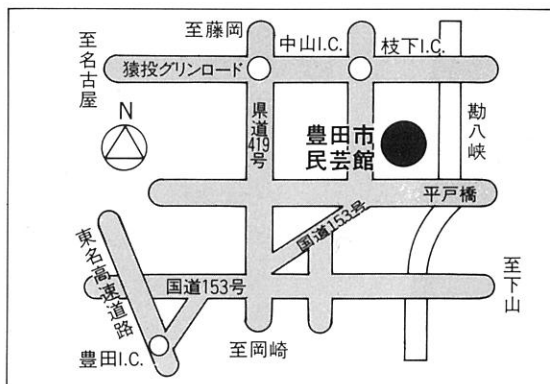
毎週月曜日・年末年始休館

入館料 無料

特色 陶芸資料館は市内平戸橋町在住の古陶磁研究家でもある本多静雄氏の、猿投窯に関して収集されたコレクションを展示しており、その展示品は、経筒外容器、灰釉浄瓶、手付瓶、陶硯、陶馬など、猿投窯の発掘品の中において最も優れた品々であります。

また、民芸館は民芸の基本理念であります「衣・食・住」のテーマに基づき、第一民芸館には染織品などの衣に関する民芸品、第二民芸館には、瀬戸・常滑・渥美の古陶器などの食に関する民芸品、第三民芸館には木工品などの住に関する民芸品などを展示しています。そして第一民芸館には、江戸時代の奇僧円空作の仏像を26体展示しています。

民芸館では年4回の、特別展・企画展を開催しております。



お知らせ

1. この度、東京都博物館協議会では、ガイドブック『東京の博物館』（改訂版）を編集発行されました。このガイドブックでは、都内の博物館、美術館、動物園、水族館など約200の施設を紹介し、各施設の特色、展示内容の概要、休館日、開館時間、料金等必要な情報を網羅しています。施設は主要地区毎に配列し、また利用者に便利な案内図もあります。東京の博物館施設を利用する際、便利な一冊と言えるかと思います。

『東京の博物館』B6版 395頁 1,000円(税込)送料200円
《愛博協加盟館（園）及び関係者は800円とのこと》

申込先 〒110台東区上野公園7・国立科学博物館内
都博協事務局『東京の博物館』係宛
TEL 03-3822-0111

2. 名古屋昆虫館は、1月末日をもって下記の新住所へ移転されました。新住所では「名古屋昆虫館（準備室）」として3月6日から活動を再開されています。従前に変わらぬご利用をお願いいたします。

新住所 〒464 名古屋市中千種区春里町1-16
TEL (052) 751-1512

開館時間 午前10:00～午後6:00

休館日 毎週木曜日と第1・第3水曜日

「愛知の博物館」No.55

発行日 平成4年3月26日

編集・発行 愛知県博物館協会

〒489 愛知県瀬戸市南山口町234番地

愛知県陶磁資料館内

TEE <0561> 84-7474

FAX <0561> 84-4932